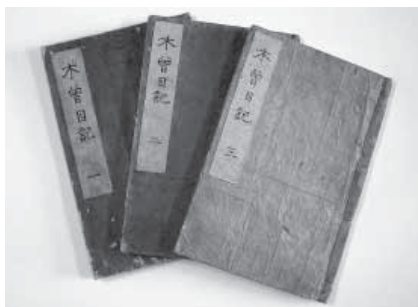


## 近江商人の道中記『木曾日記 一』

末永國紀  
本村希代  
奥田以在

『木曾日記』は近江国蒲生郡日野（現、滋賀県蒲生郡日野町）に本宅を構える近江商人、西村市郎右衛門家の三代目、西村市郎右衛門安則が記したものである。西村市郎右衛門家は武蔵国葛飾郡吉川（現、埼玉県吉川市）に出店を有し、屋号を幾久屋と称した。『木曾日記』は全三巻からなるが、本稿ではその第一巻を紹介する。第二巻は次稿、第三巻は次々稿に紹介する予定である。

まず西村市郎右衛門家について略述しておく（第1表）。西村市郎右衛門家は、近江源氏・佐々木氏の支流福永秀高の後裔であるという西村徳右衛門家を本家とする<sup>①</sup>。初代市郎右衛門安則は四代徳右衛門安順の次男として延享二年（一七四五）に生まれた。幼名を豊三郎という<sup>②</sup>。本家徳右衛門家は、出店時期は不明であるが、明和年間にはすでに武蔵国葛飾郡番匠免（現、埼玉県三郷市）において借蔵による酒造業を営んでおり、安永年間に同郡平沼（現、埼玉県吉川市）へ出店を新たに構えるにいたった<sup>③</sup>。なお明和八年（一七七二）に作成された「勘定目録書」を見ると、番匠免出店嵯峨屋豊三郎から江州日野本家西村徳右衛門へ宛てられたものとなっており、初代市郎右衛門は当初、本家と共に生計を立てていたと考えられる。なお初代市郎右衛門が本家から分家を許され、また吉川店を構えた時期については不明である。ただし吉川と平沼は隣接しており、両家の密接な関係がうかがえる。



三代市郎右衛門安則

初代市郎右衛門は文化五年（一八〇八）に没する。その際の「譲り状」<sup>⑤</sup>によると、吉川店の有金高は水車場・酢醸造場・徳用金をあわせると金三〇四二両二分にのぼった。なお水車場は溝沼（現、埼玉県朝霞市）、酢醸造場は本家徳右衛門家の出店があった平沼に存在し、その他にも酒造場を彦野（現、埼玉県三郷市）に有していた。初代市郎右衛門は本家同様、醸造業を営んでいたことがわかる。そして初代市郎右衛門の死後、同家を継いだのは初代の長男市蔵（定縁）であった。しかし二代市郎右衛門定縁には嗣子がなかったため、蒲生郡川合村（現、滋賀県東近江市）森嶋吉兵衛の四男与四郎を天保期に二代目の三女きみの婿養子として迎え入れた。<sup>⑥</sup>この人物が『木曾日記』の作者、後の三代西村市郎右衛門安則である。

第1表 西村市郎右衛門家歴代当主

名 前	幼 名	生 年		没 年		備 考
		年	月	年	月	
初代市郎右衛門安詮	豊三郎	延享2年	(一七四五)	文化5年	(一八〇八)	四代西村徳右衛門安順次男
二代市郎右衛門定縁	市蔵	安永7年	(一七七八)	嘉永3年	(一八五〇)	初代市郎右衛門安詮長男
三代市郎右衛門安則	与四郎・市蔵	文化7年	(一八一〇)	慶応3年	(一八七六)	川合村森嶋吉兵衛四男
(為七)		天保3年	(一八三二)	文久元年	(一八六一)	西生来村川島八左衛門九男
四代市良右衛門	千太郎	安政2年	(一八五五)	大正13年	(一九二四)	為七男
五代市良右衛門	森五郎	明治17年	(一八八四)	昭和13年	(一九三八)	蒲生郡蒲生堂村安井九右衛門男
六代市良右衛門	英男	明治44年	(一九一三)	平成6年	(一九九四)	蒲生郡日野西村薫男次男

出典：私家版「西村市郎右衛門家系譜」。

・為七は家督相続せず。

・明治5年の戸籍編成の際、「市良右衛門」と登録により、「市郎右衛門」から「市良右衛門」となる。

全三巻からなる『木曾日記』はそれぞれ、第一巻は天保六年（一八三五）、第二巻は嘉永元年（一八四八）、第三巻は安政六年（一八五九）の作となっている。三代市郎右衛門は自らを菊の屋（菊廼屋）園守と号している。養子らしく幾久屋の園を守るという意気込みが伝わる雅号である。本稿で紹介する第一巻は、本宅のある近江国蒲生郡日野を天保六年五月四日に出発し、中山道を通り、同月十五日に武蔵国葛飾郡吉川の出店へ到着するまでの、全十二日間にわたる道中記である。その序文においては、梶原保なる人物により「今おとこありけるか、日ものゝ里をうる旅立して吾妻の方へ行ける」と紹介されているように、「伊勢物語」第九段の在原業平東下りが念頭におかれているといえる。三代市郎右衛門は、近江商人に必然的にもなう長旅の労苦を、懐郷の念を秘めた俳味のある和歌狂歌に託しながら旅を進めている。なお第二・三巻においては漢詩なども見られることから、三代市郎右衛門の文芸への素養

のほどをうかがえよう。

ちなみに、三代市郎右衛門の交友のなかには、漢詩人で書家でもある間中雲颯がいる。雲颯は文政元年（一八一八）の生まれで、養子に入った間中家は下総国猿島郡岩井村（現、茨城県坂東市）の代々の名主であり、酒造業を営んでいた。口絵に掲げた三代市郎右衛門の肖像画に書かれた安政庚申年（一八六〇）の賛は、雲颯の書であり、両者に交遊のあったことがわかる。

『木曾日記』第一巻からは、当時の近江商人の旅事情も垣間見ることが出来る。たとえば五月十一日、三代市郎右衛門は和田へ宿泊している。その際「はたこせんこれ迄八百五拾文にてありしに、今宵八百七拾式文なり」と、宿泊代金がいともより高いことを指摘している。近世期の風俗についてまとめた『守貞謄稿』によると、安政期以前の中山道における商人宿代金は、一四八文が相場であった。<sup>8</sup> このことは旅の初日の五月四日に高宮へ宿泊し、「来て見れハこ、もはたご八百五十」と、狂歌に詠んでいることから確認出来るよう。しかし和田の宿については代金が高い分「もてなしよかりし」と、サービスの良さを評価している。また五月六日、三代市郎右衛門は鶴沼の野口定兵衛へ宿泊している。「こ、ハ度々泊りし家にて饗応もあしからず」とあるように、野口定兵衛は懇意の宿であったことがわかる。つまり近江商人にとって、本宅と出店との往来は恒常的なものであった。なお西村市郎右衛門家は日野大当番仲間に属していたが、この旅においてその定宿を利用したことは確認出来ない。

また同書では中山道沿いに暮らす人々についても詳細に記している。五月四日は端午の節句の前日であり、八日市においてチマキをつくる女性の姿を取り上げている。そして翌五日は垂井南宮大社の祭礼と出会っており、祭りで賑わった後の人々を「夕ざれハ草臥れにけん人々のかほハ青暮あしハ赤坂」と、夕方には疲れた様子となっていることを面白おかしく狂歌に詠んでいる。

三代市郎右衛門による『木曾日記』第一巻は、筆写によって他へも流布していた。武蔵国児玉郡下阿久原村（現、埼玉県児玉郡神川町）の浅見家には「東下り旅行記」という、『木曾日記』第一巻と内容は同一であるが、文言の異なる箇所が多数見られる文書が残されている。浅見家は近世期には下阿久原村における寺社の総代、明治期には阿久原村村長をも輩出する家である。<sup>10</sup> ただし浅見家へ「東下り旅行記」が伝わったのは、同文書の末尾に「紀元二千五百四十一年七月三十日明治十四辛巳年なり」とあることから、明治期

以降とされる。<sup>11)</sup>『木曾日記』第一巻の完成からはかなり年を経ている。しかしこのことは、『木曾日記』第一巻が時を経ても伝えられるだけの完成度の高い作品であったことをあらわしている。

凡例

- ・原文には適宜読点「、」を付した。
- ・原則として常用漢字を用い、人名など固有名詞については原文の文字をそのまま使用した。
- ・かなは現行のひらがな・カタカナに改めた。
- ・意味が通じにくいが原本のままとした時は(ママ)を加えた。

註

- (1) 滋賀県日野町教育会編『近江日野町志』巻中、臨川書店、一九八六年(復刻版)、六四四～六四五頁。
- (2) 私家版「西村徳右衛門家系譜」によると、徳右衛門安順は四代徳右衛門ではなく、三代徳右衛門となっている。
- (3) 西村泰郎家文書「乍恐以書付御詔奉申上候」(#169)。なお同文書には「徳右衛門義ハ生国江州日野町百姓徳助第二御座候」とある。徳助とは初代市郎右衛門の兄、つまり五代徳右衛門のことであることから、初代市郎右衛門は何らかの理由で、一時的に本家徳右衛門家の当主となり、その後分家し、市郎右衛門家を構えるにいたったと考えられる。西村泰郎家文書の番号については「西村泰郎家文書目録」による。
- (4) 西村泰郎家文書「勘定目録書」(#379)。
- (5) 西村泰郎家文書「譲り状」(#168)。
- (6) 私家版「菊廼屋園守略歴」。

- (7) 間中雲颿については、互隆雄氏によってまとめられた私家版「北総の漢詩人 間中雲颿」によった。
- (8) 喜田川守貞著・宇佐美英機校訂『近世風俗志』一、岩波文庫、一九九六年、二一八頁。
- (9) 滋賀県日野町教育会『近江日野町志』巻中、臨川書店、一九八六年（復刻版）、三七九頁。
- (10) 浅見家文書「東下り旅行記」(MS.59)。浅見家の「東下り旅行記」では『木曾日記』第一巻の序文部分が欠落している。なお、浅見家文書の番号及び、浅見家については埼玉県立文書館『白石家・浅見家文書目録』、一九七三年による。
- (11) 前掲、「東下り旅行記」(埼玉県立文書館の解説による)。

なお本稿は、平成一七年度私立大学等経常費補助金特別補助高度化推進特別経費大学院重点特別経費(研究科分)による研究成果の一部である。

〔余紙〕  
一 木曾日記 一

木曾日記序

今おとこありけるか、日もの、里をうぬ、旅立して吾妻の方へ行ける、其道々にされ歌よみてひとつの草紙とハなしたりける、短夜の寢覚に棧道の危きを越ゆる中にも、本山に鳴郭公山田の蛙の声も皆歌なり、ちからをも入れずして雨降のミの笠をなか／＼しくも間にあわせ、目に見へぬ神仏を願ひちらし、武きもの、ふの跡をも囁ミまハし、若き土女のころをもとろかし、在五中将の東下りの物語りも反古籠にかくれたるハこの草紙なり、千早振かミ五文字より末七文字にいたるまで、ぬは玉のやミ雲に云ちらしたるにハあらで、呉竹の世々に名たつる人々の真似して、あし引の山川越へて東路に幾日経ぬらん、旅衣の虱を払らひて木曾日記となせるはしに、千代の古る道古るめかしくも、露のはしかき百羽かき垣根の木の葉かき集めたるにさも似たるかも

爾時あめやすんする八ツの年の春の頃なりけり

梶原保 述

天保むつのとしさつき初の四日、又々東に下るとて人々に送られ、互にいとまこひして立別れぬ、去にても活業チガハレとハ云ながら、生れし国をはなれ親しき友とちに別れて、遠つ境に赴くこと更に心に快からず

下りてハのほるものとハしりながら

猶うらめしきいとまこひかな

八日市迄来ぬれハ、宵節句とて女おほくつどひ、粽チマキまき居しを見て、こそこのけふハ家にありて、われもかゝるわざなし、を思ひ

思ひ出て又くり返すをたまきの  
ちまきまきにし宵のむつこと

この夜ハ高宮の駅、玉屋といへるに宿かりぬ、さまでの饗応ハあらねとも、又あしゝともいふまじく、かの一休禪師の住吉まふで  
にハあらねとも

来て見れハこゝもはたご八百五十  
何たかみやと人のいふらむ

五日○朝またきに高宮を出、多賀の社を遙にふし拝ミ、鳥井本を過<sup>り</sup>りすりはりの峠に登りて

古郷もこんとし迄の名残そと  
うらみかほにてかへりミつ海

この頃ハ夜ミしかにていとねむくありしが、醒井の銭屋にて茶漬をたうべ

かいさぐる腰巾着の銭屋にて  
夕べの夢も今ハさめが井



ねものかたりにて

さらぬたに思ひ出つ、恋しきに  
ねものかたりの名ぞうらめしき

近江路をはなれてをのか美濃わさや幾たひか、るうき思ひ、たらちね今須古郷ハ雲か煙にうづもれて、今ハ歎くによしなすと、心ハささへ関か原、あしの垂井も打ちこらへ、赤坂に着て泊りぬ

けふハ南宮の御祭礼とて垂井よりいと賑ハしく、夕暮ちかくこのあたりへ帰る人々ハミな草臥れしありさまを見て

夕ざれハ草臥れにけん人々の  
かほハ青墓あしハ赤坂

六日○赤坂を出て呂久川を打渡りぬ、このあたりハさいつ頃の霖雨に水押て、麦も菜もそこないしを見て

ろく川の水におされてろくくくに  
みのらで麦ハみなたねもなし

美江寺ミエジに着ぬ、けふハ空かき曇り四方の山々も見えされハ

古郷の山たに今ハよもみえじ  
日に遠さかる旅にしあれハ

河渡川ガワドも打わたり、加納ちかく来ぬれハ、みちのかたハらなる家にうるハしき少女の絹はたおり居しを窓よりさしのぞき、いみしくもおれるものかなと心もうかれ

いとすぢもみたれぬ御代に機おれる  
をとめのすかたしばしなかめん

名残をしくも立出て加納の駅に憩ひつゝ、猶おもかけの忘れず

何事もねかひ加納の宿ならハ  
機おる人にあふこともがな

わらしの紐を結び添、笠打掩カサヒひ杖をひき、加納の宿も立出れハ、左に見ゆる岐阜キフの山、むかし信長公の住玉ひし所とき、

金花山むかしの光りきえはて、  
今ハ蛙の小田になくのミ

漸あ鵜沼に着て野口定兵衛といふ家に泊りぬ、こゝハ度々泊りし家にて饗応もあしからず、さるにあかり床のうへに芦あしに雁かりのらんまを入たり

くる度に宿ハ野口と定兵衛に  
あしかりなんとたれか思はん

座敷より犬山の御城を見て

夕暮に瓦ハ黒く壁白く  
ぶちにぞ見ゆる犬山の城

七日○鵜沼を立出て岩屋の観音にまふとて

人しらぬわか数々のねきことを  
こゝにいはやの南無観世音

大田川の渡し場に来て藤寄ぬしの溺れしことを思ひ、又年月のはやきを歎きそゝろにあハれを催ふして

行ものハかくのときか大田川

おぼれし人ははやミとせへつ

伏見に着て

憩ひぬれハマつ茶をひとつ呉竹の

ふしミのさとの茶屋の少女子

みたけに来て薬師堂にまふでぬ、このてらハむかし飛驒のたくみなる人の建し御寺なりと云伝へぬ、されとも軒いとひきし幾年を  
ふるでらなれハ

みたけひくき御堂の軒ハこけむして

其まゝるりの光りやすめり

細久手に来て笹屋にいこひ

笹屋てふ茶屋の女を来てミれハ

ほそくてならで尻ハふとくて

けふハ朝より霽かたき空なりしか、大田に来て少しふり出ぬれと、早くもやミにけれハ、雨衣を出さで来しが、ほそくてを立出る

と又降出し、せんかたなくあまきぬを打掩ひぬるにやミなくふりけれハ

さらぬだにぬる、袂を五月雨の

ふるさと遠き旅の夕暮

大きにて着、山城屋に泊まりぬ、ひと夜天井にて鼠のいたくさハぎけれハ

山城屋泊りの客ハすくなくて

た、天井に鼠大きくて

八日○続て雨降ぬ、十三峠をよぢて榎かねまで来ぬれハ漸雨やミぬ、木真亭といへるにいこひて四方の気色をミテ

五月雨のはれ間に四方を見渡せハ

遠近山を雲のまきかね

十三とうげを下り西行塚を見て

いかなれば西にハゆかで東路の

この山かけに跡やとめけん

大井につきぬ

のれといふをきかずにゆけばうしろより

大井くよばる馬かた

中津川に着て東屋といへる家に憩ひぬれば、いとふるびたる女の白湯のことき茶を持出けれハ

いかなれハ茶にも人にもかくばかり

色香ハさらに中津川とハ

今までハ雨やミてありしか落合に来て又降出しぬ

漸とやミにしものをこゝにきて

又はらくと雨の落合

程なく雨やミぬ、夫より十石峠によち登れハ又ふり出しぬ、此所ハ美濃と信濃の境なれハ

五月雨ハ人の涙かをのがみの

たひを信濃にふりミならずミ

馬籠<sup>マゴメ</sup>を過妻籠<sup>ツマゴ</sup>に着ぬ、けふ八元より此宿に泊りなんと思ひしに、まだ日の高くあれ八人々の意にまかせ、やがて妻籠を立出ぬ

妻こめし宿と聞てハなつかしや

ひと夜あかしてかたりてんものを

みどのに着て泊りぬ、山田の蛙あまたなきて淋しき声にハあらねとも、何とやら哀を催ふし

手枕にはやまとろめハ古郷の

夢をみとのに蛙なくなる

信濃路の山田の蛙声々に

かへれくとなくかと思ふ

九日○みどのを立出ぬ、今朝ハ空快くはれて殊さらに寒けれハ、こりのうちなる衣を取出し打掩ひ、野尻まで来ぬれハ辰のなかバにもなりぬ、又さらに暑さを催ふしけれハ、衣をぬきてこりにおさめなとするに、はや人々の出行バ

たとり来て花屋の下女の尻をだに

ミるまもなくていそぎ出ゆく

須原の柏屋に来て

くたひれてまつ一ふ(マ)をすはら宿  
そのたばこほんこ、へかしハヤ

此あたりハすべて木曾川の流に添ふて登りぬ、凡旅ハ物うきならひにて心淋しきものなれハ、暫くあゆミを留て川の流をミれハ、水のた、えし所ハその色藍のこどく、又岩にせかれ石を走らして別れくゝに流るゝ時ハ色さらになし、親しき人とても別れてハかくやあらんと打歎き

よりてこく別れて薄し谷川の

水の流れと人のこゝろハ

扱しもあらぬことなれハせんかたなくもあし曳の山又山路打廻り、小野の滝に着ぬ

源ハ小野か雲井かしら滝の

をつれハおなじ木曾川の水

寢覚(ネガ)にきて



信濃路のうきねの床の寢覚にも  
わすれぬもの八人のおもかけ

木曾路に名高き棧にて

幾たびかこゝに木曾路の山つたひ  
命を的にかけはしそうき

福嶋に来てきぬやに泊りぬ

夏旅ハしばく汗をふく嶋に  
母のあたへしきぬやよごるゝ

十日〇ふく嶋を出、宮の越ワを過行ハ道の傍に木曾殿の石牌あり

身のために旅ハ木曾路もよし仲の  
いしふみこゝにきてみやのこし

幾日の旅に身もやつれ心も細る山かけや、かゝる思ひを又たれにつげの櫛、うるやごはらも跡に見なして立出つ、鳥井峠も打越て

なら井の駅に憩はんとしていこはず

夢に帰りうつゝにゆきて杖をだに

と、めあへぬハ旅のなら井か

漸煮川ニエに来て瓢箪屋へつじやといへる茶屋にいこひけるに、豆を煮るとて大きな鍋にちいさきふたをして、しきりに煮上りしかハ、いと  
おかしく思ひ

ぐつぐつと豆煮川ニエへへうたんを

けこみしことくなべふたはうく

本山にきて初めて郭公をさく

いみしくもなく郭公なれハ本

山がそたちのものにしあれと

洗馬セバに来て泊りぬ、さるにふろの湯のいたくにごりてありしかハ

木曾殿の馬あらひてやかくはかり

ふろのゆにこる洗馬のはたこや

十一日○洗馬を立て桔梗かはらを打越、塩尻にいこひぬ

思ひきや茶屋の女に塩なくて

た、尻はかりぬつと出んとハ

とミに塩尻を立出て又山路にか、りぬれハ、躑躅ツ、チの花のいとうつくしく谷々に咲けるを見て

一しほに詠めハふかし花つ、ぢ

やしほに染る塩尻の山

夫よりよつ屋にいこひ、近道を行て諏方スハの社にまふで

心たに誠のミちにかなひなバ

近道きても神ハとがめじ

和田峠にのほり

是ほどに高くのほれと久かたの  
そらはいよくとうげにぞ見ゆ

うつむいて郭公さく峠かな

なと口すさみつゝ、峠を下り和田の駅につき永井喜左衛門といへるに宿かりぬ、然るにはたこせんこれ迄八百五拾文にてありしに、  
今宵八百七拾式文なりといへり、されともそれほとのことハありてもてなしよかりしかバ

出す錢ハなか井なれとも和田のやと

御ぜんも夜具も至極よし盛

十二日○長窪を経、あした芦田につきて大あくびして

此ころの日の長窪にあしたより

夕べをかけて幾日来ぬらむ

望月八幡も打越、塩名田をすぎ岩村田にきて

信濃路のつゝく深山を塩灘と

いづくの人のいはむら田宿

小田井に来て

こゝは小田井われハねむたい道かたい  
あしがいたいひとつ呑みたい

追分の原にて日野安井ぬしの帰国に逢ぬ

つゝ、かなく帰れや君ハ古郷へ  
われハ東へ追分のはら

左に浅間山見ゆる、けふハ空かき曇りて麓のミ見えしかハ

浅間山ミねのけふりもしら雲の  
深間にいりてけふハかくれつ

沓掛を過、軽井沢に着ぬれハ、日もすてに暮て殊更にくたひれけれハ

かく迄に荷物もあしも重いものを  
かる井沢と八間もうたてし

十三日○けふも空打曇り今にも雨ふらんけしきなれとも、軽井沢を立出て碓氷峠に打登り、上野の方を見おろして

上野の雲ハこひともうすいとも

新町迄ハゆくと貞光

旧嶺を下り坂本を打過、松井田に憩ひ、爰にて帰り馬を値イヤすく定め、馬子に打向ひて

なれ馬をとくこしらへて引來れ

われハしはらくこゝに松井田

安中に着、馬よりをりぬ、けふハ十三里ほどの道なれハ、殊に心もいそかく詠め案するひまもなく、あしの板鼻たへしのび、夏の日あしの高崎もくるれハ、馳て倉ヶ野にならぬひまにと急きつ、新町宿に着にけり○急き候ほとに是ハはや新町宿に着て候、日の暮て候へハ宿りを求めんと思ひ候へ共、今夜の定宿ハ崎玉やと申してこゝらよりハまだ殊の外遠く候

新町に日くれてつけど定宿ハ

まだくずつと寄玉屋なり

十四日○けふハ朝まだきより雨ふりて、むさしきたなすべりミち、うそにハあらで本庄にくたびれにけり、泥水や馬糞マクソの汁の深谷フカヤをも過て、程なく岡部にて 岡部六弥太忠純の旧跡あり

おかべだに六弥太くハで雨の日ハ  
たゞすみ染の合羽きてゆく

熊谷の堤にて

雨衣ハあつもりなれと熊谷に  
ふる五月雨ぞつきとふしける

暮て鴻の巢に泊りぬ

五月雨にぬれにぞ濡し旅ころも  
これをどうしやうかうのすのやど

十五日○今日もつゞいて降けれども、せん方なくも宿を出ぬれて、哀れスズの五月雨や軒ノキにうけたる、桶川も過て御江戸を余所にミつ、葎ワしげれる細道をたとりくくツキて岩槻イワキにきぬ

おとなしくむすめの御茶を汲出て  
嚙おつかれと岩つきの茶屋

越ヶ谷<sup>ヤ</sup>に来て

近江路を立出てよりけふ迄に  
幾山川を越ヶ谷にきつ

日くれて漸つ、かなく吉川に着ぬ

幾日へてこゝに幾久屋の宿なれハ  
くたびれしとて今ハよし川

目出度かしく

天保六年未五月記

菊の屋園守 印

弥生のはしめいとうるハしく綻ひかゝりし桜を庭にうつし、かくみやびたる花のむくつけきわれらのなかめとなり、花の思はんこ



ともはづかしけれとも

うつし植て花の心に染ずとも

われこそ今ハなれがぬしなれ

かくハ打吟し朝な夕な目かれもせず詠めしに、ある夜はけしく嵐して次の朝起出てミれハ、あさましくもちりうせて見るかけもなき哀れのありさま、寔に生者必滅会者定離の理り忽ちに心悟りて

ちりてこそ今ハなかくうれしけれ

心にかゝる雨風もなし

